

## 浦西和彦先生インタビュー

秦 重 雄

本稿は、二〇一七年九月一六日に秦重雄氏が浦西和彦氏に実施されたインタビューです。秦氏および故浦西氏ご遺族のご了解のもと、ここに掲載することとなりました。このインタビューは、二〇一七年末に、一部の関係者に送付されました。冒頭の「みなさまがたへ」はその際に、インタビュアーに添えられたものです。当時の状況がよくわかりますので、このまま掲載することとしました。(編集部)

みなさまがたへ

二〇一七年十一月一六日、関西大学名誉教授、日本社会文学会会員の浦西和彦先生がお亡くなりになりました。

二〇一七年の九月上旬に和田崇さん(三重大学)からご連絡があり、浦西先生の御体調が相当悪いことを知りました。すぐ浦西先生に電話しました。

「手術ができない、臓がんになった。『延命措置』はせんといてくれ、なりゆきにまかせろ、と医者に伝えた。まあ、一年後か、三年後かにお迎えがくるやろ。」

とお元氣なお声で明るくお返事をされました。

そこですかさず、「先生、誠に失礼ですが、インタビューをさせて下さい。」と申し込みました。「さあ、体調が持つかない？」  
「二〇分でも、一五分でも。インタビュー中に気分が悪くなったら直ちにやめます。」との応答をしました。

というわけで、九月一六日(土)ご自宅の上牧町周辺は大雨だったんですが訪問し、約二時間のインタビューを行いました。浦西先生のお声はしっかりと、お話は淀む所はありませんでした。インタビュー終了後、奥様のご運転で駅まで送っていただきました。車中も浦西先生と普通に話しました。

インタビューの文字起こしはひと月もかからずできたのですが、細部を調整してから浦西先生に見てもらおうと置いておきました…。

一二月月上旬に東京の大和田茂さんから連絡をもらい、浦西先生の訃報を知りました。実は同日に八五歳の叔父がなくなり、三日間ほど新聞の訃報欄を見る余裕がなかったのです。また、浦西先生のお言葉には「一年後」はございましたが、「半年後」はなかったのでインタビューの文字原稿の完成は二〇一七年中も…という認識でした。

二〇一七年が終わるにあたって浦西先生の生前インタビューを完成させて、御関心ある方々に送ります。浦西先生の語り口を出来るだけ活かしたつもりです。

なお、生前インタビューの公表につきましては浦西先生から許可は得ておりました。

御参考に…「新刊紹介」（秦執筆）浦西和彦著『文化運動年表 昭和戦前編』

『社会文学』第四六号、二〇一七年七月

「書評」（秦執筆）浦西和彦著『著述と書誌』全四巻

『社会文学』第三二号、二〇一〇年二月

## インタビュー

二〇一七年九月一日（土）午後から約二時間。

浦西和彦先生宅で。聞き手は秦重雄。

○浦西和彦先生のご経歴

（日外アソシエーツ刊『日本プロレタリア文学史年表事典』二〇一六年、の奥付による）

一九四一年大阪府生まれ。

一九六四年関西大学卒業。

関西大学文学部教授。

二〇一二年定年退任。

## 秦

お体に差し障りのない程度に質問させて下さい。

関西大学を卒業されて岐阜県坂下女子高（現在の岐阜県中津川市坂下の坂下高校）へ行かれたのはなぜでしょう？

**浦西** 関大の学部を卒業して坂下女子高に行った。当時は、小

さな町で岐阜県と長野県の県境にあった。いい所であった。

就職部の窓口でたまたま岐阜県の教員募集があった。安保

闘争の後で、田舎で暮らすのもいいなと思っていた。高等

学校なのでもっと大きな所だと予想したが、土地勘もない

場所、新しい女子高だった。住むのは良い所だった。行

き手のない教師だとか、新採用の人だとか、自分の様なよ

そこから来た人が多かったと思う。校長が面接の時に、島崎藤村のゆかりの地が近くにあるので国語の教員がこの学校に来たがる、と言っていた。まあ、行つて良かった。

秦 先生と岐阜県とは何かつながりはあったのでしょうか？

浦西 全く関係はなかった。もともとどこでも良かった。たまたまだった。

葉山嘉樹と出会ったのもたまたまだった。坂下は岐阜県だが、木曾川を越えると山口村があり、葉山が晩年住んでいた。坂下とも行き来していた。学生時代にプロレタリア文学は多く読んでいなかったが、葉山嘉樹を読んでびっくりした。昭和一〇年代の作品にも葉山には良い作品がある。何とかしないといかんと思った。すべて偶然だった。

小さな学校で文芸部があつて雑誌『友樹』を年二回出していた。顧問をして葉山嘉樹の特集号を出した。学校で葉山の特集をするなんて無茶をしたが若いから出来た。三〇〇部くらい出していた。顧問だから年二回は何か書かないといけない。ということと葉山を調べ出した。

一九七五年発行の『葉山嘉樹全集』は小田切秀雄さんが筑摩書房に話を付け、中野重治さん、寺田透さん、金子洋文さんが編集委員となった。編集と章立ては全部自分がやった。良い作品がたくさんあった。

それ以降は、目立たずに良い仕事をした人、里村欣三や伊藤永之介などの『文藝戦線』派の文学者を主に調べてみた。

今は、プロレタリア文学というより、文学そのものがダメになつてしまった。ほとんどが読まれなくなつてしまった。あの当時は小説を読む文学青年がいたものだ。文学全集、個人全集が編まれ、文庫本も多く出された。今は推理小説の作家しか文庫本にならない。国文学をやる今の学生は三島由紀夫も、川端康成も、大江健三郎も知らない。

秦 田舎では資料集めは大変だったでしょう？ どうされたんですか？

浦西 独身だったから、夏休みに四日とか、一〇日とか、またつた時間を取つて、国会図書館にこもつた。あの時は安い宿が相部屋であつた。(秦：相部屋があつたんですか！)出張で東京に来る人が利用していた。毎年夏休みは国会図書館に行つていた。当時は近代文学館がまだなかった。(秦の注：日本近代文学館の開館は一九六七年四月。)

秦 当時の国会図書館は昼休みは出納しないし、一回に三冊までなのでずいぶん不便ではなかったですか？

浦西 その代わり利用者が少ないのでわりと回転が速かつた。案外のものびりしていた時代だった。大学にかわつても、学会に顔を出さずに、国会図書館(後には日本近代文学館も)に入り浸つていた。出張で学会に行くことにしていた。でも学会に顔出しせず、出張費をもらつて国会図書館か近代文学館で調べていた。あまり人とのつながりを持たないようにしていた。たまたま人と出会うとこれを調べようとい

う予定がパーになる。めつたに会わない人と会うんだから無視できない。これを調べようと思って東京に行つて知っている人に会つたら話をしなさいといけない。知らん方がいい（大笑い）。そうして一〇年、二〇年過ぎたんやな。

雑誌を調べようと思うと大阪でも資料がない、結局は国会図書館に行かないと。あの時代は雑誌の復刻版がなかった。近代文学館が『文藝戦線』の復刻版を出してくれたのが最初だった。復刻版が出て来たから地方にいても雑誌を見る事が出来るようになった。でもそれで原本を調べなくなつた。そういう傾向が研究者にはあるんやな。

あの時代の古書店は面白かった。揃いでなくてもいろいろな雑誌が出ていた。今は出て来ない。

出てきても高価な値付けをしていますね。古書店もしっかり勉強していますから。

なかなか光の当たらない、注目されていない作家をお調べになつたのはなぜでしょうか？

浦西 葉山に出会つてまわりを調べ出したのがきっかけ。それと大阪に関係するものを調べ出して拡げてしまつた所がある。

谷澤（永一）さんはぼくの師匠だが、本や雑誌はもう太刀打ちできないと思つた。新聞やつたら勝てるやろうと。そう最初から決めてしまつた。谷澤さんの弱いところを考へて、谷澤さんは運動するのがイヤだから出歩かない。そ

れならと地方の新聞や大学新聞を国会図書館に行つてノートを取つていった。今はマイクロフィルムや復刻版があるが当時はなかった。『文化運動年表』はその時のメモをまとめたもの。『読売新聞』なんかがそう。今やれと言つても出来ない。そうやって積み重なつていった。

大学新聞―帝大新聞なんかは案外面白い。わりと作家が書いていた。プロレタリア文学者だけではなく、普通の文学者も意外と多く書いている。逸文がいくつか出て来る。

秦 メモをするとおっしゃいましたが京大カード方式なんですか？

浦西 自分用のカードを使つていた。大学図書館が新築する時に古くていらなくなつたものを全部処分すると言つてきた。古いカードケースを処分するくらいならとその時に貰つた。何台置いたかな。今は丸善も図書カードを置いていない。そのカードケースに入れて整理し、カードで記録していた。

秦 整理の仕方は年代順ですか、作家別ですか？

浦西 だいたい年代順。図書カードは整理が便利。たとえば橋本英吉を調べようとしたら並べ直して組み替えるだけ。なにより良かった。定年退職の時にはそのカードケースの処分に困つた。家に持つて帰るわけにはいかないから一番頭が痛かつた。結局は全部処分したが。なんせ、本と言うのは重いし、場所を取るし、整理しなかつたらある本もどこにあるかわからないし、ないものと同じになる。

定年退職の時に、家の本と大学の本と全部一緒にあきた文学資料館に寄贈したんや。どんなところ知らない、行ったことがないんやけど。おさめときや何とかなると。将来、必要な人はどっか探してくれるやろ。伊藤永之介も『種蒔く人』も秋田やから、一番いいかな。

秦 秋田県立大学の高橋秀晴さんから「浦西さんから寄贈された。少しずつ整理しています。」とお話いただきました。二〇〇九年一〇月の社会文学会秋季秋田大会はあきた文学資料館で行われました。

浦西先生と谷澤先生とはどういう御関係なのでしょう？  
浦西 谷澤さんからはいろいろと学んだなあ。坂下の文芸部の雑誌を谷澤さんに送って認めてもらった。坂下に行かなかったら近代文学の研究をやっていなかったかもしれない。  
秦 『文化運動年表』も『日本プロレタリア文学史年表事典』も一〇一年、二〇〇年の蓄積じゃないですよ。

浦西 日外アソシエーツは定価は高いけど売れない心配はない。一定の部数を確実に売っている。

秦 『文化運動年表』も『日本プロレタリア文学史年表事典』も五〇〇年、一〇〇〇年残る業績ですよ。それを見越して日外なんかは出版したんでしょうね。

浦西 最初は、『文化運動年表』も『日本プロレタリア文学史年表事典』とをセットにして本作りを考えていた。組み方がうまくゆかなくて、別々になった。

『日本プロレタリア文学史年表事典』は校正の段階で事典にしてくれと注文された。あわてて事典らしく体裁を整えたけど困った。事典なら売れる、図書館が置いてくれると判断したんやな。

秦 浦西先生には複数のテーマがあつてそれを追求されている。

浦西 やつてみたいテーマがあるけど、昨夏にガンだと言われて結局は時間がないのであきらめなかんかった。ガンだと宣告されて映画化された文学作品を調べようと思ったやりかけて調べ出して昭和二年位で中断した。うかつだったが、映画化されたものがすごい数にのぼることが分かった。吉川英治や菊池寛やの作品がすぐに映画化されている。映画が娯楽やったから。大衆文学は映画化されている。自分の残された時間のあと二、三年では無理だと分かった。思いきって止めてしまった。ともかく膨大な数だった。  
秦 文学作品と映画とはどうしても映画の方を下に見る感覚が研究者にはありますね。

浦西 最初から今の映画の様ではなく、チャチなものだったから。『金色夜叉』が一番映画化されている。芝居のセットを映画にした。

大学を辞める前にテーマを震災に絞った。どういふ発言を文学者がしているか、調べ出した。やりかけて福島震災やろ。原発事故がどうなるかわからなかったからやめて

しまった。原発のことは終わることがない、永遠のものである。神戸の震災に絞っとけばよかった。関東大震災でも集中すればよかったかも。関東大震災はほとんどの文学者が体験している。死んだ文学者は一人だけだった。書き手が残ってくれたから出版の復興も早かった。菊池寛は悲観的だったが。関東大震災はそれまでの近代の矛盾がいっぺんに噴出したもの。大震災が無かったら昭和の時代はもっと変わった。大震災で負債をいっぱい抱えて無茶なことを続けた。今は建物の造り方も人々の意識も大きく違う。あの時は火を点けっぱなしにして避難したんやから。でも今は地下の影響が怖い。あの時は地下の心配はしなくて済んだ。原発の心配もしなくてはいけない。本当に安全なのだと。

秦 それはそうと『温泉文学事典』は今迄とは違う着想でしたね。

浦西 当時は冷暖房がなかったから。文学者は寒くなると熱海とかの温泉に行き何日も籠って書いていた。多喜二も温泉に泊まって書いていた。きちっと長いものを書こうとすれば家にいれば家族もいれば用事もできる。あの頃は旅館も安かった。梶井基次郎の旅館も粗末なものだった。あまりお金持ちでなくても泊まることが出来た。文学作品には意外と温泉が出て来る。角度を変えて拾ってみたら面白いやろうと。出るのが時間がかかった。入稿してから出版まで

が。著作権の問題が出て来たから。要約は著作権を冒している、という考え方が広がって来たから。司馬遼太郎の要約が遺族から訴えられて裁判で負けてからビビッてしまった。作家の文章を載せるわけではない、事典やから、というのがこちらの言い分、本人が生きていりやどうってことないんだが。『石川近代文学事典』で後ろに文学碑の一覧表を載せた。室生犀星の文学碑の俳句を載せたんだが、遺族が訴えたよってに問題になった。本人がおりや、かえって喜んでくれるのに。売れる本でもないのにビビッてしまつて、『温泉文学事典』は出るまでに時間がかかった。温泉が出て来る描写は引用が出来ない、短歌や俳句は引用しないといけない。弁護士も仕事がないからいろいろ言うてくる。長い引用はひっかかる。

秦 あちやう、あらう、広い世間ではそれほど厳しくなつていたんですね。

浦西 非営利の一般的な学術書ではなかったら、ひっかかってしまう。犀星の著作権が切れる直前だったから。それでなかったら、もう少し面白い本が出来た。

秦 浩瀚な文学碑事典もすでに刊行されていますし、地方自治体のHPには短歌・俳句の全文を載せたコーナーもあるのですのに。

浦西 それと旅館の悪口が書いてあるのは営業妨害になってはいけないのでカットした。

作家にとって正直な気持ちが現れている箇所を我々研究者は当たり前と思って引用したいのだが、そういう所を削った。面白みがなくなってしまうんだが、『温泉文学事典』は一番売れたんじゃないかな、再版が出たから。

個人文学事典は出しにくい。個人情報を守ると言われるから。ヘンな時代になってしまった。生きている人の生年月日や出身学校のこととは載せられない。文芸事典の時代は終わった。ほんのちよつとの時代の差がある。『四国近代文学事典』の時は、俳句の同人に往復はがきで本人の経歴を問い合わせたが返事をくれた。石川県のアレで懲りた。我々の学生の頃の何でもない事が通用しない。時代とともに変わってゆく。まあ、それを使って悪いことをする奴が出て来たからね。震災などテーマごとだったらまだ大丈夫かもしれない。

秦 話はプロレタリア文学に戻りますが、今後に残るプロレタリア文学の魅力はなんでしょう？

浦西 文学運動としてあれだけ大きい運動はなかったんじゃないか。それも東京だけではなく、地方でも若い書き手が生まれ、それが革命運動と結びついてゆく、きわめて特別なものだった。従来、本を読むのは知識人中心で農民や商人には贅品だった。しかし、プロレタリア文学が生まれてから、本を読む人が増え、大衆化が進んだ。それどころか工場で働いている人も文章を書くようになり、そこから作

家が生まれた。今までになかった現象だ。庶民の文化が高まっていった。プロレタリア文学の革命はソ連や北朝鮮のような社会を目指したのではなく、もつと夢のある理想社会を目指した。今は否定的にとらえられているけどプロレタリア文学があつたゆえに庶民の文化が豊かになった歴史的事実は消すことが出来ない。

現代社会ではプロレタリア文学に書かれているような現実がいっぱいある。電通の過労自殺がそうだ。労働組合がある時代にプロレタリア文学の時代の悲劇がなぜ起こるか、不思議だ。

昭和の時代と今の時代はちがうんだが、現代のプロレタリア文学が書かれないといけない。もつとも書いても社会の方がどんどん進んでゆくから書くのは難しいやろな。

秦 一九八六年に『日本プロレタリア文学書目』が出版されたのはびっくりしました。プロレタリア文学の単行本ではなく、プロレタリア文学に関わった作家の一九四五年までの書籍を全部拾い上げている。その探求の精神には圧倒されました。

浦西 プロレタリア文学の研究と言うことで多喜二や百合子をやるだけのことを済ますんじゃないかって、例えば、林房雄とか藤森成吉も沢山の本を出している。それらをなんとかまとめた気持ちが強かった。

谷澤さんは幅広いんだが、ぼくにはここしかないと思っ

た。プロレタリア文学の本を集めることに集中した。谷澤さんは、「本を貸してください。」といえませんが貸してくるのだが、それは一切しなかった。自分の手で集めた。他人の手を借りてはだめ、ここだけは！ って思ったんやろな。

谷澤さんの家に行ったら家じゅう本だらけで、書庫を見たら絶望的になった。こんだけあらゆるものが集まっているのに自分はどうしようかと考えた。一カ所だけ徹底するしかない。

東京の青山毅さん（一九九四年没）とも近代文学館でよく一緒にした。青山さんもプロレタリア文学に関心を持っていて集めていた。

**秦** 一九七九年に青山さんの御家を訪問し、本棚を見せてもらいました。きちつと整理されてましたね。

文学研究は無くならないと思うのですが、有効性はなかなか認めてもらえませんか。

**浦西** 近代文学に限らず、古典の研究でもこの人はすごい、という人がいなくなりました。『源氏物語』の研究でもそうだ。目先のことばかりやって、科研究にあたるかどうか、それほどばかり心配している。何十年かけてコツコツやる研究が無くなった。国の方針は良くない。近代文学の研究もそうだ。国文学研究にお金を出さなくなった。そんなものは好きな人がやっておればいいので税金を投入してやらんでいい、

という考え方。自然科学だけいい、と言っている。

**秦** 文学研究は人間の研究だから「役に立つ」と思うのですが。

**浦西** 吉田精一の時代は大学で近代文学を教えなかった。京大もつい最近まで近代文学をやる人はいなかった。古典一本やりだった。高度成長で大学で近代文学の講座を設けるようになった。

**秦** 細かい話ですが、学生時代にマルクス・エンゲルスを英文で読んだ林房雄や浅野晃はなぜあのような転向をしていったのでしょうか。

**浦西** 林房雄はもとにも取り組む必要があったやろうな。才能があり過ぎたんだろう。『青年』は作家同盟に評価されなかった。彼の転向はきちつと調べておくべきであった。戦後は家庭小説・ホームドラマを書いた時期がある。三島由紀夫を惹きつける怪物であったことは確かだ。一面、わりと素直な面もあった。『越中谷利一著作集』を編纂する時にこの作品は実はあなたの作品ですか？ と聞いたことがある。そしたらそうだと認める返事を寄越した。案外素直な人だという印象を受けた。

**秦** 越中谷利一とも岐阜つながりでしたか。

**浦西** そう。『岐阜文学』をやっていた大牧富士夫さんがなくなつたことを知らせてくれた。越中谷利一は戦後は俳句の方向に行った。会ったことはない。亡くなってからのつながりだ。江口渙との関係が強かった。越中谷はナップに参



加し、江口渙もナツプに行った。

秦 京都に三月書房という有名な新刊本屋があつて、四〇年前前に古書を集めだした時に店主の後ろの棚の高いところに『越中谷利一著作集』が一冊置いてありました。それで、古書ではなく、新刊本として『越中谷利一著作集』を購入しました。

浦西 一段組み、七〇〇ページの大冊だった。手書きの原稿でコピーは青焼きの時代だった。箱は大変シンプルなものだ。  
秦 森田草平を研究されたのも岐阜つながりだったんですか？

浦西 やっぱり岐阜つながり。坂下高の文芸誌『友樹』で特集をやった。そのまま進んでいたら、漱石関係、その周辺を調べていたやろな。まあ、葉山嘉樹を調べてその方向には行かなかつたけど。草平には面白い作品がある。部落問題を扱った『輪廻』もいい作品だった。草平はだいぶん集めた。漱石をやる人は多いから、漱石とその周辺の人たちの調査は一時やろうと思つたが結局はやらなかつた。

秦 江口渙は『わが文学半生記』の中で森田草平をクソミソに書いていますね。日本共産党の同志なのに。草平の日記を読みますと共産党に入党してから大変誠実に党活動を行っている、勉強もしていますね。

浦西 真面目なんやろ。覚悟して入党したんだろう。  
秦 草平の『私の共産主義』に入っていない文章も少し集め

たんですが、草平はエンゲルスの『家族・私有財産・国家の起源』を読破したり、頑張っています。江口渙はヌーボーとして漱石先生に叱られる森田草平を描いていますですが情がない書き方ですね。

浦西 江口渙は漱石山房にあとからちよつと顔を出す。格が違う意識もあつただろう。ねっからのやつかみもあつたかも知れない。

秦 二〇年ほど前に阿智にある草平の文学碑を見に行きました。細川嘉六の書いた文字がかすれていました。お寺の本堂を見て「ここで細胞会議をしていたんだな。」と想像しました。浦西先生が江口渙の「或る女の犯罪」を手厳しく批判されていますがこういう風に読むんやなと大変勉強になりました。

大田洋子をされたのもなぜなんでしょう？

浦西 やっぱり原爆がきっかけだった。彼女は悪口をよく言われていた。人間的に良くなかつたんやろな。そのファクターを除いて、原爆を描いた作品は読まなあかん、ということで大田洋子をやつてみた。人がやつていない人をやりたかつたんやな。借金を踏み倒したり、評判が悪い、全集もない、でも原爆ものはきちつと残さなあかん、と考へたのが調べるきっかけやつた。

秦 三一書房がよく出しましたね。  
浦西 話を作つてくれた人がいて、知らない色々なメンバー

が入ってきた。良く出来た。四巻本だった。

秦 のちの『日本の原爆文学』を編むきっかけとなりましたね。

浦西 今は個人全集は出ない。インターネットの青空文庫が出たもんやから本が出にくくなった。文化が進むのはいいいことなのか、難しい。

秦 青空文庫は便利なことは便利です。スタンダードな作品ならわざわざ本棚を探さなくてもすぐに読み返すことが出来ますから。

全集では最近『谷崎潤一郎全集』が中央公論社から出ていますね。谷崎潤一郎と江戸川乱歩しか個人全集は売れない時代になってしまいましたか。

浦西 中央公論社は良く出した。でもあの全集は書誌をきちっとしていない。きちんとする人がいないんやろな、谷崎の研究者はたくさんいるのに。谷崎の書目はあるが初出をきちんと調べていない。全集というのならやっというて欲しい。いまの研究水準ならその辺のことはやっているもの、と思いますが、違うんですね。

河野多恵子さんは異色なんですけど河野さんをされた理由をお聞かせ下さい。

浦西 それもやはり大阪の人やから。彼女は丹羽文雄のところに行くんやな。みんな左翼的な作家の所に行くのに珍しかった。田辺聖子と正反対。ある意味プライドが高いんやろな。田辺聖子さんの文学とは認めないと思うほどに。

大阪の人では、藤本義一や山崎豊子もしたかったが出来なかった。藤本義一は映画の脚本を書いていて、藤本家に保管されている話があった。思い切って見に行けば良かったが行かなかった。

秦 大阪のプロレタリア文学やその流れを汲む『関西文学』についてお聞かせ下さい。

浦西 『関西文学』は結局は同人誌なんやな。面白いのはプロ文系と織田作之助らが一緒になって『大阪文学』を出したことだ。

秦 『大阪文藝雑誌総覧』には明治の時代の『なにはがた』が最初に載せられていますね。

明治の大阪文壇があればどんな感じだったんですか。

浦西 京都や大阪にも出版社はたくさんあった。京都は仏教書を出すのが出版社の仕事で文芸ものには手を出さなかった。関西の一番ダメなところは文科系の大学を作らなかつたことなんや。若い大学生が文芸ものに手を付ける。三高・京大からしか作家は出ていない。やっぱり大阪は商売人の街で出版社は文芸ものを出してもつぶれて行く。丁稚奉公のひとは文芸書は読まない。懐に入れられる立川文庫を読んでいた。江戸時代からの流れがあるんだが読者の層がまったく違う。

大阪はおばちゃんらが芝居を見に行く。その読み物を新聞小説が書いていた。新聞小説のとおり芝居が上演され

る。菊池幽芳や渡辺霞亭など新聞小説と芝居は密接な関係があった。連載の途中から早々と芝居になったものもある。お金にならない文芸ものは関西では育たなかった。連載小説と芝居と講談で当時の新聞は決まっていた。やはり読み手がいないと文学は育たない。後に大阪毎日芥川を客に迎えたがそれは大正も半ばを過ぎてから。

今みたいに流通機構もないし、全国ネットもないから文芸ものはやっぱり東京中心になる。それは昭和三〇年代から四〇年代まで続いた。

映画は違った。京都でつくって広まって行った。映画は大衆のものやった。

文芸ものは金にならなかったから若い人は、梶井基次郎もそうなんやが同人誌で発表した。だから当時の同人誌はレベルが高かった。いまはどうなんやろ、村上春樹はうまい書き手と言えるけど文学作品としてはもう一つのような感じやな。

私も村上春樹は評価しませんが、世界中で読まれているので評価の食い違いに戸惑います。

ああ、もう二時間近くになってしまいました。先生のお身体にさわると思いますのでインタビューはこれくらいに致します。どうも長時間ありがとうございました。

## 秦